

〔教育をめぐる随想〕

「自己の形成史」ノート (1)

—「自己の価値意識形成史」から道德教育を考える—

押谷 由夫

はじめに

今の私はどのようにして形成されたのか。教育を考えるにあたり、まず求められるのは、自己の形成史を探ってみることです。人間は、自分を離れて、考えたり行動したりすることはできません。常に、自分とのかかわりにおいて、考えたり行動したりします。自己の形成史を探ってみることによって、自分の生きる姿勢や考え方の根本にあるものが見えてきます。それは、自らの教育観の根底にあるものと言えます。自己の形成史と対話しながら、教育の本質や今日的課題に対応する教育、一人一人の子どもたちの実態に応じた教育などを考える過程で、自らの教育観を発展させ、教育的実践力と自己を高めていくことができます。

私は、大学院の道德教育の授業で、必ず、自己の価値意識形成史について発表してもらいます。そのことによって、今自分がしようとしている研究の位置づけと方向性が見えてくるからです。今の自分は、過去の歴史を背負っており、未来の自分は、今の延長で拓かれていきます。自己の価値形成史を起点として、今の自分の関心をとらえ直すと、何を、どのように研究していけばよいのかが、より鮮明に見えてきます。

では、私たちは、どのようにして価値意識を身につけたのでしょうか。価値意識が関係していると思える事柄が、次々と思いつかぶはずで、それが私たちの価値意識の形成に大きな影響を与えていると言えます。

なぜなら、道徳的価値は心を動かす大本だからです。心が動かされたからこそ、心に残っているのです。そこを深く見つめれば、今につながる価値意識を探っていくことができます。それらをつなげていくことで、自己の価値意識形成史の骨格を明らかに

することができます。

それは、私自身における道德教育であるということが出来ます。そこから道德教育とは何かを考える、より主体的にとらえ方が出来ます。そして、その視点から、現在の学校における道德教育をとらえ直すとき、より主体的に理解することができます。

本稿では、「私」自身の価値意識形成過程を探ることから、このことを実証的・実感的に明らかにしていきたいと思います。

1 乳幼児期と「私」

(1) 家庭環境

「私」は、昭和27年の3月に、滋賀県長浜市で生まれました。3000gの元気な赤ん坊であったようです。「私」には、3歳上(学年は2年違います)の姉がいます。長男が生まれたということで、家族はことのほか喜んだようです。

家は、普通の農家です。両親と祖父母が同居しており、両親は働き者で、子守は祖父母の役割でした。幼いころの思い出としては、祖母のひざの上に乗って一緒に火鉢にあたって餅を焼いている姿などが浮かんできます。祖父には、同じようにひざの上で浄瑠璃を教わってもらっていたことが思い出されず(若いころ浄瑠璃を教わっていたようです)。

そして、祖母や祖父の手の皺をつまんでいたことが強く記憶に残っています。祖母は小学一年生のときに亡くなったのですが、手の様子は鮮明に覚えています。後年、父の手の皺が祖母とあまりにも似ており、びっくりしたことでした。

両親は、ともにきょうだいが多く、父は5人きょうだいの長男、母は7人きょうだいの長女です。父母との幼児期の思い出は、多くがおじ・おばの家や母親の実家に連れて行ってもらったときのことと重なります。まつりなどには、祖父のきょうだいも含

めて多くのおじ・おば等が家に来てにぎやかだったのを覚えています。

(2) 幼稚園での思い出

幼稚園には、1年間お世話になりました。長浜市立北郷里幼稚園です。鮮明に覚えているのは、副園長先生と担任の先生です。借りてきた猫のようにおとなしい園児でした。姉と近所のお姉さんに連れて行ってもらいました。副園長先生が大きな声で、ときばき指導される姿を、憧れをもって見ていたのを覚えています。まったく新しいタイプの大人に出会い、印象が強烈だったのだと思います。ブランコから滑り落ち、水溜りでお尻がぬれてしまったとき、飛んできて対応していただいたのがいまだに忘れられません。

担任の先生は小島先生でした。若くてやさしい先生です。一番印象に残っているのは、「私」の家から帰られる先生の後姿です。実は、5月ごろ、おたふく風邪にかかり、しばらく休みました。その後いわゆる登園拒否になり、先生が心配して家に来てくださったのです。お会いしていたときのことは覚えていないのですが、先生の後姿を、小屋の窓から、隠れて見ていたのはよく覚えています。ほっとした気持ちと、先生に悪いなという気持ちがあったように思います。

また、母親の里に法事か何かで連れて行ってもらったときに、小島先生とお会いしました。そのときも、にこにこしながら「よしおちゃんはいつもおりこうさんですよ」といったようなことを言ってもらって大変うれしい思いをしました。親戚ではなかったのですが、いつも気にかけてくださったのを覚えています。

まだまだ思い出されますが、とくに印象に残っているできごとを、ピックアップすればよいのです。

(3) 乳幼児期の体験が今の「私」にどのように影響しているか

これらの体験は、今の「私」の人間形成にどのような影響を与えているのでしょうか。もちろん、その後の体験が積み重なって今の「私」ができていますが、2つほど挙げてみます。

一つは、おとなしい性格の形成です。両親の乳児期の「私」への対応は、おとなしくしているように、

ということが基本であったようです。静かなところに寝かせて、起きてくるまでじっと見守っている。そして、歩けるようになってからは、祖父母のひざの上が定位置だったようです。大事に大事に育ててもらいました。乳幼児期におけるこのような体験は、自分の性格の根底をつくっているように思います。

二つは、人間関係の基礎的な意識の形成です。ものごころがつく前から、いろんな人々に声をかけていただき、抱かれたりする体験は、やはり心に残っています。また、ものごころがついてからは、いろんな人々にお世話になったという意識が強くあります。それはいつも母親が、「なかようしてあげてな」とか「たすけたってな」（ふるさとの方言です）とか言って、特に年上の人とのかかわりをもたせてくれたことが影響しているように思います。さらに周りの大人からも困っているときや気まずい思いをしているときに、よく声をかけてもらったり、助けてもらったりしたことも影響しています。

乳幼児期の思い出としては、どのようなこと（遊びなど）をしていたかというより、どのような人と、どのようなかかわりをしてきたか（とくに感情面での意識）が強いです。乳幼児期に性格形成と人間関係の基礎を形成することが実感できます。

2 小学校低学年期と「私」

(1) 小学校に入学したころ

小学校は、幼稚園の隣にある長浜市立北郷里小学校でした。小学校に入学したときのことは、あまり記憶にありません。ランドセルを買ってもらったこと、制服を着て新鮮な気持ちで学校に行ったことは、思い出されます。今考えると、小学校に入学したときは、喜びよりも不安のほうが大きかったようです。母親が用意してくれた服や帽子を母親に着せてもらう。父親や祖父母は、にこにこしながら「立派になったねー」などとほめてくれます。しかし自分としては、なんだかわからない。母親に連れられて、母親の陰に隠れて、きわめて受身的に入学式を迎えたように思います。

(2) 川井澄子先生の思い出

このような傾向は、ほぼ2年間続きました。一、二年の担任の先生は、川井澄子先生でした。先生の

ことは、特によく覚えています。ことのほか、かわいがってくださいました。いつも笑顔で声をかけてくださるのですが、自分から話しかけていったことはほとんどなかったように思います（そのように話しかける友だちをうらやましく見ていました）。親から言われている先生に対する姿勢（先生が話されることは、きちんとして聞くこと、先生の前ではしっかりしていること）と、やはり早生まれというのが大きく影響していたように思います。心の中では、先生に対して「もう一人のお母さん」のような意識をもっていました。

川井先生との思い出は、次の3つのことがすぐに思い出されます。

一つは、市の書写コンクールに出す作品を放課後に残って書いていたときです。先生から「コンクールに出すから残って作品を書いてください」と言われたのですが、そのこと自体を大変うれしく思いました。そして、「よしおさんは、字がうまいのよ」と、「私」が書いている字を見ながらにこにこして、隣のクラスの先生と話されていました。緊張しつつ、ものすごくうれしい気分になったのを覚えています。本当は、字はうまくなかったのですが、自信をもたせてやろうとする、先生のお心遣いだったように思います。

二つは、祖母が亡くなったときです。一年生のときの冬休み中（1月3日）に突然祖母が亡くなりました。学校が始まって、廊下の掃除をしていると、先生がほうきを持って近づいて来られ、「おばあさんが亡くなられてさみしいね」とやさしく声をかけてくださいました。そのときは、まだ死というのがあまりよくわからなかったのですが、先生は「私」のことをいつも思っていてくださるのだなという思いを強くもちました。

三つは、一年生の通知表の記述です。「よしおさんは、お人形さんのようですね」と書かれていました。そのことを祖父が大変喜び、いつも話してくれました。おそらく川井先生は、おとなしくちょこんとしている「私」を見ていて、思わず書いてしまわれたのだと思います。祖父は、おとなしくし先生の話をよく聞いている姿を思い描いて喜んでいたようです。

なお、後日談ですが、川井先生は、私たちの担任を終えられると退職されました。脳の病気だとお聞きしました。その後ずっと年賀状を出しており、先生からも言葉を添えた賀状をいただいていた。

しかし、お会いすることはありませんでした。高校のときに先生の家の前を通ったことが何度ありましたが、先生らしい姿を拝見することもあったのですが、どきどきしながら通り過ぎてしまいました。

それは、子ども心に先生は脳の病気をされており、「私」のことを忘れておられるかもしれないという強い不安があったからです。先生のお宅のそばを通るだけで、私は先生に対する感謝の気持ちを高めるだけでなく、先生のためにも頑張らなければいけないという思いを強くもつことができました。

10年近く前ですが、お孫さんからお葉書をいただきました。「おばあさんは亡くなりました」という内容でした。ぜひお参りしたいと思いました。夏休みに実家に帰ったときに、思い切って先生のお宅にお伺いし、仏前にお参りをさせていただきました。お子様ご夫妻が迎えてくださり、生前よく「私」のことをお話しされていたとお聞きしました。仏前に掲げられていた写真を拝見すると、「私」がずっと記憶していた当時の川井先生そのままのお顔でした。

改めて先生に感謝し、心の中で会話をさせていただいた次第です。そのことは現在も続いています。

（3） 小学校低学年の体験が今の「私」にどのように影響しているか

このように小学校低学年の「私」を振り返ると、一にも二にも、先生との思い出です。小学校に入学することの意味を子どもなりに理解しています。それは、親の対応等から感じ取ります。しかし、そのことが、不安を募らせます。

おそらく、一年を担当される先生は、新入生に対して、学校に慣れるためのいろんな取り組みをされます。それは大変重要なことですが、子どもにとっては、やはり担任の先生が私の味方かどうか、つまり私をかわいがってくださるかどうかが最大の関心事であるように思います。

「私」は、早生まれだったから、特にそのように思ったのかもしれませんが。様々な体験活動を、大好きな（私を大切にし、かわいがってくださる）先生と

一緒にできることが何よりうれしいのです。その先生との思い出が、脳裏に焼きつき、生涯にわたって私を和ませ、勇気づけ、励ましてくれます。

「私」にとって、川井先生と出会えたことは、本当に幸せでした。

3 小学校中学年期と「私」

(1) おとなしい子から腕白な子に

「私」の小学校中学年時代は、鮮烈に覚えています。三年生になったとたんに、がらっと変わってしまいました。大変な腕白になったのです。

そのときの気持ちを探ってみると、本質的な部分が変わったのではなく、周りの友達が暴れたりしているのをうらやましく思いながら眺めていた今までの自分から、実際にできる自分になったということです。おそらく、早生まれのために友達と自分の間にあった成長の差を感じなくなったのだと思います。

友達をぼんとたたいて逃げる。追いかけるがなかなかつかまらない。それが楽しみでした。一度しつこく追いかけて、授業時間がきているのに中庭で走り回っていて、教室の窓からみんなが見ていたことがありました。先生に怒られたのは、言うまでもありません。

(2) 学校外での遊び

中学年は、遊びほうけているといったほうがいいのか、遊びまわっていました。家で遊ぶのは近所の友達です。同級生は近くにいず、この時期は年上の友達との遊びに夢中になっていました。いろんな遊びをしたのですが、空き地でいつも相撲をとっていたこと、神社やお寺の境内で、あるいは刈り取りが終わった田圃でソフトボールをしていたこと、近くの川をどんどん上っていきながら魚取りをしたこと、近くの森にあけび採りに行ったことなど、次々に思い出されてきます。ほとんどが男の友達との遊びです。

家族とのかかわりは、田圃によく手伝いに行ったことが思い出されます。手伝いをした後、母親が冷たい川の水（農業用水用にポンプを使って吸い上げられた地下水）に冷やしておいてくれた採りたてのトマトのおいしかったこと。農繁期に田圃でみんなと食べたおにぎりの味も忘れられません。

また、父親とは、よく相撲をとっていました。とにかく強かった。田圃から帰ってくると、待ち構えていたかのように、相撲をとりました。父親も疲れていたはずですが、むしろ父親のほうから誘うこともあるくらいでした。父親とは、毎朝、川原に行っていました。牛とやぎを飼っていたために、えさにする草を刈ってくるのです。「私」も自転車で行っていました。不気味な雲がもくもくと広がってきたときの恐怖、坂道で転んでしまい近くのおばさんに助けってもらったこと、芋のつるの葉をおいしそうに食べる牛の様子等々が思い出されます。

(3) 個性的な先生との出会い

「私」の三年生のときの担任は、中川英一先生でした。図画工作が専門です。市内でも指導的立場におられる先生だということを何となく聞いていました。怖い先生でした。よくげんこつをもらいました。欲求まかせに暴れまわっている「私」に、自制心を培ってくださいました。そして、先生が専門とされる図画工作の時間に、「おー、この線はいいぞ」とほめていただいたのが、いまだに脳裏に焼きついています。その後、絵を描いたり、物を作ったりするときに、丁寧に、かつ少しユニークさを出して取り組むようになりました。その気持ちが今に生きているように思います

四年生のときの担任は、塚田泰三先生でした。ベテランの先生で、学校の行事等でもよく司会をされていました。印象に残っているのは、グループ学習を取り入れてくださったことです。普段の席もグループになっていました。男女を問わずすっかり仲良しになりました。特に同じグループ内のメンバーとは、いろんなことを話し合うことができました。そのことを通して、随分と集団性を養うことができました。その中で、自分を振り返るということも、知らず知らずのうちにできていたのだと思います。

(4) 一人で宿泊する体験

もう一つ忘れられない体験があります。この時期、冒険的なことに興味がわきます。その一つが、一人で母親の里に行き、泊まることでした。母親の里は、いま石田三成の生誕地として話題になっている長浜市石田町です。「私」の家から2キロほど離れています。いつもは母親や姉と一緒に歩いて、まだ

一人で行って泊まったことはありませんでした。

そこで、一度一人で泊まりに来ないかと言われて、喜んで出かけました。お菓子も用意してくれていたりにして、大変心地よかったです。翌日、家に帰ってきて、風呂で大泣きしていました。どうして泣いたのか。やはり、母方の祖母には、申し訳なかったのですが、不安感とさみしさを、夜に一人になったときに味わったようです。

小学校中学年の時期は、外へ外へと関心が向きます。強がったりもしてみます。しかし、内心は、不安感が大きいです。そのあたりの心の状態を実感して、さらにいろんなことに挑戦することが求められます。この体験をばねに、様々なことに挑戦したかどうかは、確信がもてないのですが、小学校中学年ならでの体験をしたことは、間違いありません。

(5) 小学校中学年の体験と「私」

「私」の小学校中学年の体験を振り返ると、とにかく活動的であったということがあります。子どもは本来活動的です。活動的でない子どもは、何かにさげざられているのです。そのつかえ棒がなくなったとき、当然動き回ります。つかえ棒は自然と取れる場合もありますが、多くの場合、教師や親の配慮が必要です。

中学年は、皆が活発になります。もっと動きたいという欲求が出てきます。そこから上級生との遊び、大人とのかかわり、自然や動植物とふれあう体験などに興味をもちます。その興味に応えるような自由と環境を身近なところに用意してあげることが大切です。

そして、もう一つ、この時期を振り返ったときに感じるのは、三年生と四年生の違いです。集団とのかかわりということ言えば、随分と成長します。また、自分に対する意識も広がっていきます。

そのことを実感するためには、発達段階に応じた対応をしていただける先生に出会うことが重要です。幸い、中川先生、塚田先生と、中学年ならでの、いい先生に恵まれました。

そして、少し飛躍しての一人での体験（チャレンジ体験）をすることも重要だと言えます。

4 小学校高学年期と「私」

小学校高学年は、人生で最も理想を追い求める時期と言われます。果たしてどうであったか、振り返ってみます。

(1) 友だちとのかかわり

「私」の場合、真っ先に思い出すのが、近所の友達のことです。近所には、1級上の先輩も1級下の後輩もいませんでした。そのような関係から、遊び仲間の先輩が中学校に行った後は、「私」が必然的にガキ大将になりました。「私」の家に皆が遊びに来てくれました。もちろん主な遊び場は、お寺の境内や空き地、田圃や川、野原などでした。相撲、ソフトボール、めんこ、くぎさし、陣取り、ちゃんばらごっこ、魚取り、冒険ごっこ、花見等、次々に思い出されます。とくに孝ちゃん（森孝之君）には、本を見せてもらったり、卵とりを一緒にさせてもらったり（家は養鶏をされていました）と思い出が尽きません。この近所の友だちがいまも「私」のふるさとの実家を守ってくれています。

(2) 学校での「私」

学校では、活躍する場を次々に与えてもらいました。学級内ではもちろんのこと、児童会でも、リーダーとして活動する場をいただきました。五、六年生の担任は、森川宏先生でした。いろんなことが思い出されるのですが、フォークダンスを教えてもらったのが印象的です。思春期の入口で、女の友達の手を握り一緒に踊ることは、口では嫌がっていましたが、胸がどきどきする素敵な体験でした。

友達が先生の家に行ったと聞いたとき、自分の心の中では、先生とは学校外でプライベートなかわりをもってはいけないという、変な倫理観をもっていたのも思い出されます。

伊吹山に夜に登った経験も鮮烈です。伊吹山は標高1377mの滋賀県で最も高い山です。いつも仰ぎ見る伊吹山の頂上に立った感激は今でも忘れません。また、五年生のときプールが完成しました。そのとき、兵藤（前畑）秀子さん（平泳ぎで日本人初のオリンピック金メダリスト）が来てくださり、学生と一緒に泳ぎを披露してくださったのも目に焼きついています。

学校での遊びは、家とは違っていました。遊び相手はほとんど同級生でした。相撲は大好きでしたからいつもとっていましたが、卓球、ドッジボール、ソフトボールなど集団競技に夢中になっていました。集団競技の楽しさを実感していました。

学校で、将来の夢について具体的に考えたことはあまり覚えていないのですが、とにかく立派な人になりたいという意識は強くもっていました。卒業式で、答辞を読ませていただいたとき、お世話になった小学校の思い出を胸に思いっきり羽ばたいていこう、といったことを話したのを覚えています。

(3) 両親と「私」

父親は、とにかくよく働いていました。ときどき一緒に田圃を見に行きました。そのときの父親の姿が忘れられません。どこの田圃にも入って行って苗や稲穂と会話をするのです。米作りが好きで好きでたまらない父の姿。おいしい米を作ろうと夢中になる姿を見て、子どもなりに感じるものがありました。父親は、口をすっぱくして「悪いことをしたらあかんで」「まじめに生きなあかんで」と言い続けてくれました。

母親も同様でした。母は、よく姉の教科書を読んでくれました。「つるの恩返し」や「大造じいさんとがん」、「ごんぎつね」、「野口英世」等は、母親の読み語りそのままに覚えています。それらを通して、具体的にはうまく言えないのですが、立派な生き方をしたいという意識を強めていったように思います。

(4) 小学校高学年の体験と「私」

このように振り返ると、一般に言われている高学年の特徴をそのままもっていたことがわかります。「私」の場合は、この時期の特徴をそのままに伸ばせる環境を与えてもらっていたことに改めて気づきます。感謝、感謝です。これらをもとに、高学年の体験と「私」を簡単にまとめてみます。

小学校の高学年の時期は、特にいろんな生き方があることに気づき、夢を描きそれを追い求めようとする強い意志を養う必要があります。そのためには、心を揺さぶる体験が必要です。一流に出会う体験、長年の夢を叶えるような体験、みんなで全力を出し合って創りあげていく体験を特に大切にしたいです。

それともう一つ、高学年としての自覚ある日常生

活が送れるように、プライド意識とリーダーシップ、それに日々の生活を律する訓練が必要です。そのためには、日々の学級生活とともに、心を鼓舞する道徳学習と低学年の子どもたちと触れ合う体験などが不可欠だということを改めて感じます。

数年前、うれしい体験がありました。母校で小学生にお話をする機会をいただきました。早速に、以上書いたようなことをコンパクトにまとめて、子どもたちにお渡しして、事前に読んできてもらうようにしました。家族と一緒に読んだ子もいて（家族の中に「私」を知っている人もいたようです）、「私」に大変興味をもってくれました。

お話では、学校と地域の思い出の場所の写真も撮って、パワーポイントでそれらを映しながら、進めていきました。子どもたちは、「私」と一緒に体験をしてくれているようでした。共通した体験を感じ取れば、その人とはすぐに仲良しになれます。そのときの子どもたちと「私」は、まさにそれでした。

子どもたちにとって小学校は格別の意味があります。一生の心の支えを作ってくれます。発達段階に応じた、かつ一人一人に寄り添った教育の大切さを、改めて実感します。

5 中学生期と「私」

(1) 部活動での体験

どの時期でも、一番に思い出すことは、今の「私」に大きな影響を与えている、と違って間違いありません。中学生の時代で一番に思い浮かぶのが、部活動です。

多感な中学生時代、思春期の真っ只中で、さまざまな体験をします。それらは、すべて今の「私」に影響しているのですが、「私」の場合はとりわけ部活動が強烈です。それは、今までになかった新たな自分を発見することにもなりました。

「私」は、中学校に入学すると同時に、迷わずバレーボール部に入りました。それは、自分がやりたかったからではありません。親友の永井和一君から、自分はバレーボール部に入るから一緒に入ろうと誘われたからです。

しかし、入ってみて愕然としました。永井君がうまいのです。それもそのはず、彼のお兄さんがバレー

ーボール部で活躍しており、だいぶん鍛えられていたようです。しまったと思ったのも後のまつり。ならばと、がむしゃらに取り組んだのがよかったようです。だんだんとうまくなっていきました。永井君と、そこそこに練習できるようにもなりました。

永井君は、いろんな意味でライバルでした。何をやってもうまい。運動神経は抜群の上に、勉強もよくできました。かっこよくって、多くの友達をもっていました。彼とは、仲がよかったのですが、常に気になる存在でした。

バレーボール部で、最初はまったくかなわなかった永井君と競い合えるまでになると、だんだんと自信が出てきます。そして、彼が得意とした400m走も、ついていけるようになりました。さらに、一年の終わりに行われた3000mの校内マラソンでは、最後まで彼と競い合い、優勝してしまいました(ちなみにこの記録は今も残っています。この1回で終わりになったからです)。

中学校二年生のときです。当時は、国民体育大会の旗を次の開催県までリレーするという取り組みがありました。その旗のリレーを少しの区間ですが母校が担当することになりました。その先頭で走らせていただくという栄を得ました。これも、つねに目標となり刺激を与えてくれた永井君のおかげです。

さらに、バレーボール部に入ったおかげで、多くの友達を得ることができました。青春時代、同じ目標に向かって、全力を出し合い、汗を流す。友情が芽生えないはずがありません。バレーボール部に入ったおかげで、多感な中学生時代を無事通過できたと言っても過言ではありません。

(2) 中学生期と社会体験

中学生の時期は、なかなか社会体験ができません。中学生になれば勉強をしなければならないし、部活動もしなければならないという意識が強く、どうしても小学校のようなゆとりをもった社会体験ができなかったように思います。近所の友だちとの遊びも途絶えてしまいます。このような状況は、今もあまり変わらないかと思います。

そこで大切なのが、学校でいかに社会体験をさせていくかです。それと家庭や地域の協力です。中学校では、様々な社会体験が計画されていますが、い

ろんな人々とのかかわりを深めること、子どもたちの心を鼓舞すること、が基本であるように思います。それが後々に影響してきます。

1) 部活動での対外試合

中学校時代の一番の思い出は部活動であることを述べましたが、いろんな人々とのかかわりを深めるという点から見ても、貴重な体験の場でした。

母校は長浜市立東中学校です。「私」が属していたバレーボール部は、後に全国優勝するのですが、当時は、県のブロック大会で優勝を競う程度の実力でした。そのブロックで一番のライバルが長浜市立南中学校でした。よく練習試合をしました。そのときは、顧問の先生も同行されます。選手と仲良くなるのは当然ですが、先生とも親しくなりました。

南中学校の顧問は、近藤正隆先生でした。厳しく温かみのある指導をされていました。東中学校では、宮川公先生、清水昌樹先生、那須成美先生(女子部の顧問でしたがよく指導していただきました)が顧問でした。先生方が仲がよいものですから、「私」たちの様子を見ながら雑談をされます。それが、よく聞こえます(むしろ耳をそばだてていたといったほうがいいかもしれません)。

南中学校との練習試合では、「私」のことはよく話題にいただきました(と思っています)。試合のときでも近藤先生を意識するようになりました。そして、試合が終わって、南中の部員たちと話をしますが、近藤先生のことよく話題になりました。

2) 母校とのつながり

その近藤先生は、「私」が大学生のとき、専攻科に一年間、研修教員として来られました。話に花が咲いたことは言うまでもありません。そして、後にですが、先生は道德教育で活躍されていたことを知りました。「私」の母校が、文部省の道德教育の研究指定校としての委嘱を受けて取り組んだということでした。近藤先生は、当時東中学校におられました。研究主任として中心的に取り組まれ、その功績が認められて、大学に研修教員として派遣されたようです。

当時荒れていた母校だったのですが、道德教育を充実させることで見事に立ち直ったということでした。実は、指定を受けた1年目に生徒の暴力事件が

起こり、全国紙に「文部省の道徳教育指定校で暴力事件が起こる」という見出しで報道されました。大学生だったのですが、大変気にしていました。

近藤先生にお聞きすると、そのあと、先生方は一丸となって真剣に取り組まれ、2年目は全国に向けて公開発表をされたということでした。後日談ですが、指定を受けて1年目で異動された先生（中川巧先生）が、校長先生として東中学校に帰って来られたときに、市の指定を受けて道徳教育に取り組んでくださいました。2年目に取り組まれたことをもう一度やってみようということでした。私もお伺いさせていただいたのですが、素晴らしい取組がなされていました。この実践が県で表彰されました。先生方の教師魂を確認させられた次第です。母校とは異なる形でつながっていくことを実感しました。

3) 地域の人々とのかかわり

学校以外で地域の人々とかかわる体験は、中学生の場合、主に地域の行事等への参加を通してということになります。「私」の場合は、家が農家でしたから、農作業の手伝いを通して近所の人々とかかわる機会が多くありました。

中学生になると、耕耘機を使って仕事ができるようになります。両親は、その様子を頼もしげに見つけてくれていました。近所の人々もいろいろと声をかけてくれます。

隣の田圃でよく手伝いをされていたのが原馬正次先生でした。原馬先生を見ながら、「由夫も先生になって、あのように手伝いをしてくれよ」と、両親からよく言われました。そのことが「私」の進路を決めたように思います。

原馬先生は、「私」が文部省に道徳担当の教科調査官として赴任したとき、同時に県の道徳担当の指導主事になりました。以後ずっと交流を深めさせてもらっています。

4) 修学旅行の体験

当時、修学旅行は、東京・鎌倉でした。何せ初めての東京です。実に貴重な社会体験でした。最初に降った品川駅の広さと、あまり新しくない旅館が、妙に印象に残っています。何人かが親戚の方と面会しているのを見て、うらやましく思ったことでした。

東京タワーに昇って、眼下を見下ろしたときの爽

快感。いつか東京に出てこようという思いを強くしました。また、鎌倉の大仏様の印象も強烈でした。鎌倉幕府のイメージと妙に重なってしまいました。とにかく「私」にとって東京・鎌倉への修学旅行は強い刺激となって、今も心の中で生き続けています。

(3) 心に残る恩師との出会い

中学校期の体験を振り返ることにおいて、最も重要なこととして押さえておきたいのが、先生方との出会いです。中学校は、教科担任制です。多くの先生方に直接授業をしていただきます。クラス担任の先生だけでなく、多くの先生方との間にも親密なかかわりが生まれ、豊かな体験を創出します。

1) 校長先生、教頭先生との出会い

「私」が中学校に入学したとき、校長先生は、曾我信夫先生でした。「私」の実家から100mくらいのところに住んでおられます。入学式のとき、新入生あいさつをしたのですが、少し笑みを浮かべて「うん、うん」とうなずきながら聞いてくださっていたお姿が、鮮明に浮かびます。きっと、嬉しさと不安が入り混じって、そのような表情をされたのだと思います。温かみを感じました。廊下であっても、道であっても、いつも笑顔で声をかけてくださいます。既に亡くなられましたが、ふるさとに帰ったとき、ときどきお会いしていました。

自分の中には、校長先生がいつも見てくださっているという意識が強くありました。やはり、校長先生とお話できることは、すばらしい体験です。それは、学校生活全体に張りをもたらせてくれたように思います。

また、西村教頭先生との出会いも強く印象に残っています。「私」のクラスの数学の授業を担当してくださいました。数学を教えるのが好きでたまらないといった様子でした。気さくな教頭先生で、「私」もいつの間にやら、先生の授業のとりこになっていました。そして、クラブ活動で、数学クラブに入るように希望を出しました。しかし、希望者は「私」一人だけだったために、結局科学部に入りました。そのとき、先生から、「もっと勉強したければいつでも教えてあげるよ」と言われました。しかし、行くことはありませんでした。今から思えば、惜しいことをしたと思います。やはり、チャンスは生かす

べきだったと反省しています。

2) クラス担任の先生との出会い

一年生のときの担任は、大塚陽一先生でした。ベテランで、ユーモアがあり、中学校の先生という雰囲気でした。学校全体での催し等においても常に全体にお話をされるような先生でした。そのような先生が担任であることに誇りを感じました。

学級委員をしていたときです。言うことを聞いてくれないクラスの友達について相談すると、「君たちの問題だから君たちで解決しなさい」と言われたことが強く頭に残っています。「私」に期待をかけてくださり、陰で支えてくださったのですが、十分に応えられなかったという悔しい思い出がよみがえります。

二年生は、西川忠邦先生でした。先生もまた大塚先生と同じような年配で、先生然とした先生でした。担当は社会科でしたが、大変几帳面にご指導いただきました。きちっと整った字で黒板をうまく使ってまとめられるその手法には、生徒ながら感心して写しておりました。学級会でだったでしょうか。「こんな人間になりたい」という作文を書く機会がありました。「私」の書いた作文を見て、「今の君のようだね」と言われてとても嬉しかったのを覚えています。気恥ずかしい気持ちもあったのですが、先生の一言で吹っ切れました。

三年生は、岩嶋左近先生でした。これまたベテランの先生でした。市内でも有名な国語の先生だと評判になっていました。そういうことは結構生徒の耳に入ってくるものです。部活動の顧問は体操部でした。体育館でのバレーボールの練習が、体操部の練習と重なったときのことです。思いっきりアタックしたボールが先生の頭を直撃しました。先生は何事もなかったかのように指導を続けておられましたが、後の練習時間の気まずかったこと。今も思い出すたびに冷や汗が出ます。

3) 他の先生方との出会い

その他にも、いろんな先生方が思い浮かびます。伊藤宏太郎先生には、駅伝の指導を受けました（後、長浜市の教育長になられていろいろとお世話になりました）。体育の先生かと思えるくらい（数学の先生です）、いつも短パンで、タッチフットボール部を指導され

ていました。退職後町長をされていた角川誠先生。新規採用で来られた甲斐沼栄先生（先生とは、恩師の研究会でお会いしました）。理科の中田環樹先生（先生とは長浜市の研究会にお伺いしたときに懇親会でお会いし、思い出話に花が咲きました）。いつも笑顔でバスケットボール部を指導されていた福永保先生。女子ソフトボール部を指導されていた中村憲雄先生（先生とは文部省の研修会でお会いしました。当時の先生方のお気持ちをじっくりお聞きすることができました）、等々。

このように、「私」を支え、お教えくださった先生方のおかげで、多感な中学生時代を思う存分謳歌しながら、無事終えることができました。そして、中学校時代の師弟関係はその後も続いていきます。

（4）中学生期の体験が今の「私」に与えた影響

以上のような中学生期の体験を振り返りながら、今の「私」に与えた影響について考えてみます。

1) 友達との親密なかかわり

中学生期は、思春期という人生の大きな課題に、正対しなければなりません。それには、周りの人々の協力が必要です。とりわけ、同じ課題をかかえる友達との親密なかかわりが重要です。

思春期は、心を閉ざしがちです。今まで経験したことのない変化を実感し、一人で悩んでしまいます。悩みを話し合うといっても、そう簡単に心を開くことはできません。勝手に心の中に入ってこられると、かえって拒否反応をおこすこともあります。

自らの体験を振り返ると、特に次の3つの方法を考える必要があると思います。

一つは、価値意識を共有することです。心を開くためには、互いを認め合わなければなりません。中学生の時期は、互いの違いを意識します。違いを認め合うには、共通の意識を見出す必要があります。「同じように悩んでいるんだな」「同じようなことを考えているんだな」と思ったとき、違いを認めることができます。その共通の意識の最たるものは、人間としての生き方にかかわる道徳的価値意識です。道徳の授業が、もっとこのことにかかわって充実されねばなりません。

二つは、思いっきり取り組める協働体験をすることです。思春期は、体も頭もいらいらします。それ

は、思いっきり体を使ったり、頭を使ったりすることによって、解消されていきます。それを、友達と一緒に行うのです。自然と心が通い合っていきます。クラブ活動や部活動は、その絶好の機会です。また、一緒に共通の目標をもって励まし合いながら勉強することも効果的です。

三つは、共同生活をするということです。中学生になると、家族と生活していても、一緒に行動する機会は著しく減少します。また、他人の家に泊まったりする機会も減ってきます。そのようなときに、何人かの友達と、同じ所に宿泊し、同じ釜の飯を食い、掃除や運動、勉強や遊びを一緒にやり、数日間日常生活を共にする等の体験が重要になります。そのことを通して互いを理解し、友情を深め、一生の心の支えとなる友達をつくることができます。

2) 地域とかかわるとともに、全国へと目を向ける

このような友達との親密なかかわりを深めていくなかで、大きな志と社会の一員としての自覚をはぐくんでいくことが大切です。大志をはぐくむには、いろいろな人々の生き方に触れることです。輝く生き方をしている人に出会い、直接話を聞く。心を込めて作られた作品に出会う。脈々と受け継がれている文化や伝統、芸術に触れ、体験する。このような直接体験が必要になります。そして、夢や希望をもたせてくれる生き方を感じ取れる小説や伝記をはじめとする読み物、映像等を通して間接的に体験しつつ、志をはぐくむことも同様に重要です。この部分に、道徳の授業がもっと力を入れなければなりません。

また、思いっきり体や頭を使う協働体験においては、地域社会とのかかわりを深めるようなものが重要です。中学生は、地域とのかかわりが極端に少なくなります。社会に巣立つための力を身につける義務教育最後の時期に、もっと地域に役立つ体験を行う必要があります。

さらに、そのような体験は、全国レベルで考えるようになることも求められます。日本一の取組をしよう、日本一になろう、といった目標は、中学生を奮い立たせると同時に、日本各地へと目を向け、全国レベルでの交流を可能にしていきます。

3) よき恩師との出会い

このような体験は、よき恩師がいてくださってこ

そ、充実します。まずは、自分が通う中学校でよき恩師と出会えることです。中学生の心のもちょう一つで、教えていただく先生方全員がよき恩師となります。

恩師は、さらにいろんなところにいます。地域にも、他の中学校にも、そして日本全国に。そのようなよき恩師との出会いを楽しみにしつつ、体験を充実させていけるようにすることが求められます。

6 高校生期と「私」

高校生期の体験と「私」を振り返るにあたり、高等学校の卒業アルバムを取り出して見ます。まず、懐かしい校舎が思い出されます。初めて登校したときの新鮮な感覚がいまだによみがえってきます。

(1) 高等学校への愛着

高等学校は、試験を受けて入学します。ほとんどの生徒にとって、人生で初めて自ら選択して入学した学校です。「私」は、滋賀県立虎姫高等学校に入学しました。同じ東中学校から進学した者は4人でした。

なぜ、虎姫高校を選択したのか。「私」の叔父は、虎姫に住んでいました。虎姫高校は、「私」たちの住んでいる湖北地域では、最も大学進学に実績を上げている高校でした。叔父が遊びに来るたびに、「虎姫高校に来なさいよ」と言います。また、叔父の家に行くときには、必ず虎姫高校の前を通って行きます。そのとき父親も「この高校でしっかり勉強せんとあかんで」と言っていました。そのようなことから、ごく自然に、高校は虎姫高校と決めていました。

幸い、その虎姫高校に入学することができました。小さいときから愛着をもち続けた学校ですから、入学式の感激はきわめて大きいものがありました。校舎がひととき大きく見えました。

(2) 自立心と不安感と

高等学校での「私」を振り返るとき、そのときの精神状態が不思議と思い出されます。同じ中学から進学した者が少なかったのも、クラスは全員初めて会う人ばかりです。また、進学校ですから、勉強に対する不安もありました。

そのような中で、最初のころに体験することは、

すべてが心に刻まれていきます。

クラスの担任は、櫛賢哲先生でした。虎姫高校出身で、この4月に母校に帰ってこられたということでした。英語の先生で大変厳しかったですが、芯のしっかりした大変魅力的な先生でした。櫛先生を通して、高校の先生像を具体化していったように思います。

そして、クラスの仲間たちとのふれあいです。最初の席順は、男女を合わせての名簿順でした。「私」の後ろが片山さんという魅力的な女生徒でした。その片山さんがすぐに話しかけてくれました。本当に嬉しかったです。今もその光景を思い浮かべることができます。そして、片山さんの友達の井上さんともすぐに仲良しになりました。おそらく、後ろの席の片山さんが話しかけてくれなければ、不安な日々が続いたと思います。

また、みんなの中で「私」を感じたのは、クラスの役割（係）が課されたことです。男女一人一人でしたから、そのパートナーの川上さんとも親しく話せるようになりました。そして、係として、全体に話す機会があり、そこからクラスの一員という意識をもつようになりました。

（3）通学路での体験

「私」の場合、自転車通学でした。8キロくらいありました。毎日通うのですが、その通学路が強く印象に残っています。

通学路は、決まっているわけではありません。最初は、同じ中学校から進学した仲間と会えるようなコースを選んで行きました。待ち合わせて行くことはありませんでしたが、出会うことが多かったです。お互いが心の中で求めていたのだと思います。

そして、その道すがらに出会う高校生は、同じ虎姫高校生ですから、自然と声をかけるようになっていきました。その友達の友達が、また友達になり、という形で友達が増えていきました。

その道すがらの風景は、今も鮮やかによみがえってきます。歴史の舞台の一つである姉川（姉川の合戦の戦場）や国友（昔の鉄砲鍛冶の集落）を通って行きました。姉川で仕事をしていた父親とも通学途中で会ったこともあります。通学路の四季折々の変化とともに、学校での出来事やその時々心の状態を

思い出すことができます。

（4）魅力的な先生方との出会い

高校時代を振り返って、特によみがえってくるのが魅力的な先生方との思い出です。高校は、より専門的にいろんな分野の学習が行われます。先生方も大変個性的で、その専門的知識やユニークさで生徒を引きつけていきます。高校生期における豊かな体験は、そのような先生方を中心にあつたように思います。

1) 学級担任の先生とのかかわり

やはり、学級担任をしていただいた先生のことが、まず思い出されます。すでに述べたように、1年のときに担任いただいた櫛賢哲先生は、大変魅力的でした。

あるとき、こんなことがありました。何に対しても忘れませんが、全校で募金活動を行うことになりました。締め切りの後、先生は烈火のごとく怒られました。「私」たちのクラスからは、だれも募金をしなかったからです（リーダー格の友達の提案に乗ってしまったのです）。「私」たちは目が覚めました。以後、学校の取組やボランティア活動等に積極的にかかわりました。先生は僧侶でもありました。

二年生のときの担任は、松島正隆先生でした。数学を教えてください、生徒と一緒に問題を解くのが楽しくて仕方がないといった先生でした。実は松島先生は、「私」が所属していたバレーボール部の顧問でもありました。バレーボール部でも「私」と一緒に練習するのを楽しんでおられました。

先生とのかかわりで妙に残っているのは、一年生の数学の時間に、机間指導をされているとき、後ろに座っていた「私」の肩を乗っかるようにぐっと押してくださったことです。バレーボール部に入ったときでしたから「がんばれよー」と応援していただいているようで、とてつもなく嬉しかったです。いまだにその感触が残っています。

三年生の時の担任は、広瀬譲爾先生でした。物理を教えてくださいました。名物先生のお一人で、丸い眼鏡をかけ、どこかアインシュタイン風でした。ぼつり、ぼつりと話されるのですが、とても温かさを感じました。進路指導も丁寧にしていただきました。

2) ユニークな先生方との出会い

最もユニークな先生は、伊藤丈夫教頭先生でした(三年の時に校長になりました)。一クラスだけ専門である地理の授業をされていました。それが「私」のクラスだったのです。その授業は、きわめてユニークでした。教科書の一頁からキーワードを拾って徹底的に調べていく。当然教科書は進みません。しかし、驚いたことに学年のテストでは、「私」たちのクラスが飛び抜けてよかったです。

一年生の時の国語は、大浜由紀枝先生でした。女性の先生に習うのはこの時間だけです。先生は、国語を愛しておられるというのが授業から伝わってきました。丁寧に丁寧に指導してくださいました。先生の名調子が今もよみがえってきます。

大石昭夫先生の化学の授業も魅力的でした。化学なんて簡単だ、と言っていつもダジャレを飛ばして授業をされます。すっかりそのペースにはまってしまう、とても楽しい授業でしたが結局化学はいつも点数がよくありませんでした。

高校のアルバムを眺めると、恩師一人一人の思い出がよみがえります。しかも、ほとんど全員の先生方との思い出が。なぜでしょう。「私」は、あまり優秀な生徒ではありませんでした。でも、先生に対する尊敬のまなざしは常にもっていました。高校生というのは、自分に対する一種独特のチャレンジ精神があります。そのためにもがき続けていると言った方が適切かもしれません。それを救えるのは先生です。先生に対するあこがれの念をみんなもっています。いかに具体的なかわりかもてるかがポイントです。

(5) 高校生時代と部活動

当時の高校生時代を振り返ると、「私」の場合、学校以外での交友関係を広げ深めていく役割を果たしたのは部活動でした。高校でもバレーボール部に所属しました。三年生になると引退しますので、一、二年生のときだけでしたが、部員同士の交友関係を深めることができました(二年生では主将になりました)。練習は、ウィークデイだけでしたが、放課後、他校と練習試合をしたり、日曜日や休日に試合があることも多くありました。そのようなときは、他校の部員と話をする絶好の機会です。

「私」の場合、中学校のバレーボール部の仲間は、こぞって長浜商業高校(現在は長浜北星高校)に進学しました。よく練習試合をしてもらい、交友関係を更に深めることができました。当時、長浜商業高校の監督は永井先生でした。沖縄出身の熱血教師で、何とかバレーボール部を全国レベルにしたいと優秀な生徒を集めておられました。その関係で「私」の中学校のバレーボール部から5人ほど進学しましたし、ライバル校であった南中学校等からもよく知っている人が進学していました。一年生のときは、まだ「私」の高校も互角に戦えました。練習試合が楽しみでした。試合が終わるといろんな話に花が咲きます。そのような交流のなかで永井先生ともすっかり親しくなりました。もっとも、二年生のときには、かなり差がついておりましたが、交友を深めることはできました。

バレーボールの試合で印象に残っているのは、ミュンヘンオリンピックで活躍した深尾吉英選手(後、東レのバレーボール部監督になりました)と1セットだけ戦ったことです(2セット目からは、温存でした)。同じ高校生でも特別な才能をもった人々と直接出会えるのはすばらしい体験です。

(6) 家庭での体験

高校時代の家庭生活を思い出そうとしても、限られたことしか思い出せません。家族は、高校に行ったことから「私」のすることを温かく見守ってくれていた、という印象が強いのです。「私」の中にも、あまり家庭のことは考えずに高校時代を過ごした、という意識があります。というより、家庭の手伝いをするのはごく当たり前と考えていたのかもしれない。

高校三年生の夏に家を建て直しました。そのため3ヶ月ほど叔母の家で生活しました。その叔母の家も新築でしたので風呂がまだ完成していなくて、近くの伯母の家に毎日みんなでお風呂をもらいに行きました。受験を控えているときでもあり、皆から気を使ってもらい、大変心地よい生活の場を与えてもらいました。そのときの温かい心遣いが強く脳裏に焼きついています。

このような事態がなければ、きわめて記憶に乏しい家庭生活であったように思います。やはり、この

時期、強引にでも家族で日常を離れた共通体験をすることが必要だと感じます。

(7) 地域での体験

高校生になると、住んでいる地域とのかかわりはほとんどなくなります。しかし、中学校で義務教育は終わりますし、私のころは、中学校を出て働く人も多かったのです。地域の一員としての体験が必要になります。「私」の場合は次のようなことがありました。

「私」たちの地域には、「おこない」という独特の神事があります。湖北地方（滋賀県の北部を言います）が京都（一説には彦根）の鬼門に当たるということで、厄払いをかねて昔から行われている町の行事です。「私」たちは正月に帰れなくても「おこない」には帰るようと言われて育ちました。

その「おこない」が、実は地域の人々との交流を図る貴重な場になっていました。15歳になると、「おこない」で元服のお披露目をします。元服を過ぎれば「おこない」に参加することができるのです。「私」も、15歳を境に地域の一員として認められたという意識を強くもちました。町内の行事や会合などにも、家を代表して出席することができたのです。

また、町のチームの一員として、青年団のバレーボール大会に参加したことも強く印象に残っています。仕事をした後、夜にみんなが集まって練習をする。その人たちとふれあうことは、大変貴重な経験でした。

これらの体験も、自分からというのは、高校時代だと難しいと思います。やはり、義務的な部分が必要です。「私」の体験からも、いい慣習は残しておいてほしいと願います。

(8) 高校生期の課題に向き合う

高校時代は、やはり友だちとの授業以外での体験が心に残っています。高校生であれば、気の合う仲間同士で、遊びに行ったり、勉強したり、ボランティアなどをしたりと考えられるのですが、「私」の場合は、残念ながらそのようなかかわりはほとんどありませんでした。同じ中学から虎姫高校に進学した者は4人でしたし、お互いの家もかなり離れていました。

もちろん、友達は、増えていったのですが、「私」の場合はクラブ活動を行っていたので、そちらのほうに時間をとられてしまい、自由な交友ができなかったと言えるかもしれません。と同時に、そのような心のゆとりがなかったようにも思います。

勉強と部活動の両立、さらに学校外での交友関係を深める、というのは中学生・高校生時代の大きな課題です。そのバランスをどう保っていくのか。どのような交友関係を深めていくのか。そのことに関して皆悩むはずで、将来に対する不安、夢や希望、生きることの意味等、高校生期ならではの興味関心とかかわらせて、ともに語り合い、励まし合い、切磋琢磨していくことが望まれます。

それを、生徒に任せていたのでは、各人の心の中での対話に終わってしまいます。自分の人生や生き方に関する悩みや思いを出し合い、話し合いを深めて、学校外でのかかわりへといざなっていけるような時間がどうしても必要になります。それは、現在ではホームルーム活動になりますが、実際は学校行事の役割分担や進路の情報提供等に時間がとられているようです。

やはり、自分の悩みや生き方等について真剣に話し合える時間を新たに設ける必要があります。学校設定教科・科目でもよいのですが、「道徳」あるいは「人生科」のようなものを設けることを真剣に考えなくてはならないように思います。

現在、茨城県や、千葉県、東京都、埼玉県などでは、高校で「道徳」を行っています。最も早くから取り組んでいる茨城県には、「私」も最初からかかわらせていただきました。高校一年生に週1時間「道徳」の授業を行っているのですが（今年度から二年生にも広げています）、生徒たちの8割以上が肯定的に評価しています。

(9) 数年前に体験した同窓生たちとの出会い

数年前になりますが、嬉しい体験がありました。高校時代の同級生の片山勝君が長浜市立北中学校の校長をされており、道徳教育の研究発表会（文部科学省指定）に招いてくれたのです。その前の年もお世話になり、がんばっている姿に感激しました。すばらしい研究発表会でした。生徒たちが生き生きしていました。

そのとき、教育長や市教委の幹部の方も参会されていました。教育長は、北川貢造先生でした。高校時代の恩師（授業を受けたことはないのですが新任2年目の先生でした）です。理事の大音寿士先生は、高校と大学の1年先輩です。高校の同年代の同窓生が、今ふるさとでリーダーとしてがんばっていると思うと感慨ひとしおでした。

高校時代は、将来の可能性をもったいろんな人々と出会います。将来、様々な場で必ず再会します（一番びっくりした同窓生との出会いは、東京の飲食店で仲間で懇談していたとき、たまたまとなりのグループの端に座っていた人と話すことができました。話していて彼が同級生だった前川君であることがすぐに分かりました）。そのとき、楽しい思い出に浸りたいです。そのことによって、自らをリフレッシュし、多感であった高校時代の気概を取り戻して、また新たな気持ちで今の仕事に取り組むことができます。

この歳になって気づくのかもかもしれませんが、高校時代に友達やいろんな人々と一緒に取り組む体験をぜひ充実させてほしいと願います。

7 これからの道徳教育への示唆

乳幼児期から高校生期までの体験と「私」の形成についてみてきました。そのなかで、道徳性の育成（人間としての在り方や生き方を支える価値意識の形成）にとってどのような体験が必要なのかも探ってきました。そこから、これからの道徳教育の在り方について、若干提案してみます。

（1）道徳教育の新たな役割を自覚しましょう

いま、教育混迷の時代と言われます。とくに科学技術の驚異的発展に伴い、社会の変化が激しく、従ってあらゆる面にわたって生活が急激に変化しています。

しかし、子どもたちは生まれたときは、今も昔も変わりません。もちろん母体からの栄養や胎内環境の違いから身体的変化はありますが、知識や行動様式を身につけて生まれてくるわけではありません。生まれてからの様々な体験を通して社会とかわり、それぞれの価値意識を形成していくのです。

社会的適応という側面では、まさにゼロからのスタートです。回りの環境や生活がめまぐるしく変化

するなかで、子どもたちはうろたえてしまいます。さらに、頼りになるべき親や保護者が、社会の変化に翻弄され確たる指導ができない状況になっているとも言われます。そのような中で、子どもたちの健全な精神的成長は、願うだけでは実現できません。

何が必要なのか。今こそ真剣に、子どもたちと向き合うことです。そして、そのことを通して大人自身が自らと向き合うことです。道徳教育の基本は、ここにあると言えます。

（2）道徳教育にどのように取り組めばよいのかをみんなで考えましょう

道徳教育に完全はありません。さらに終わりもありません。人間としてどう生きるかは、私たちの永遠の課題です。それはまた、社会の変化によって大きく左右されていきます。昔であれば、子どもたちが日常生活を行う中で自然と生き方の基本を学んでいきました。それは、そのような環境にあったからです。

外に出ればいろんな人々と出会え、声をかけてもらえる。友達と思いきり遊ぶことができる。直接自然にふれたり自分たちで考えたりしながら生活することができる。そういった環境と時間的ゆとり（ゆったりとしたときの流れ）がありました。

今は違います。意図的に望ましい環境を創ってあげないと、子どもたちは社会の変化に押しつぶされてしまいます。放っておけば、子どもたちはテレビづけになってしまい、ゲームやインターネットにはまり込んでしまいます。そのような状態では、健全な精神的成長は望めません。豊かな体験について吟味する意味もそこにあります。

今、教育論争が過熱しています。それは大変よいことだと思います。その動きを追いながら（流されるのではなく）、望ましい道徳教育の在り方について、自分自身を振り返りつつ、考えて欲しいのです。

（3）道徳の本来的意味

そもそも道徳とは、どのような意味をもっているのでしょうか。道徳という言葉は日常用語でもあります。漢字の意味から探してみると、その本質がよくわかります。道は、首とシンニョウ（シンニユウ）から成り立っています。首は頭を表します。シンニョウは足を表します。つまり、道とは、漢字の構造

からみると、頭を前に出して回りを見つめて、自分の頭でよく考えながら、自分の足で歩いていくこと、ととらえられます。そこに道ができます。

徳については、どうでしょうか。徳の右側は、昔は直、一、心と書きました。つまりまっすぐな心、そのものの本質を意味します。魚の徳は泳ぐことです。鳥の徳は空を飛ぶことです。

では、人間の徳とは何でしょう。人間が他の動物と著しく異なるのは、高度な精神活動を営むことができることです。人間は、多様に感じ、考え、表現する能力をっていますが、それらが、よりよいものを求めようとする内面的な力とかかわることによって高度な精神活動が営まれます。そのよりよいものを求めようとする内面的な力こそ、人間の徳であると言えます。それは、人間らしい心であり、道徳的価値を求める心とすることができます。

また、徳は、得でもあると言われます。すなわち、徳は、そのものの本質を意味するだけではなく、その本質を自分のものとして身につけることも含んでいます。

このように道と徳を見ていくと、自ずと道徳の意味が理解できます。すなわち、二つの言葉を合わせれば、人間らしい心（道徳的価値）を求めて、限りなき道を、しっかり前を見据えて、自ら考え判断し、自分の足（体）で体験しながら歩み続け、自分らしく身につけていくこと（自分らしい道を創っていくこと）、ととらえることができます。

それを、日常生活の中で、どのように追い求めるのか。当然、自分一人で生きるわけではありません。社会の中で、皆と一緒に生きるのです。その一人一人が道徳を追い求めています。そして社会にはすでに社会道徳が存在します。また自分が属する集団には独特の集団道徳もあります。それらとかかわりながら自らの道徳を追い求め自己を確立していくのです。学校教育はこのことを応援するものでなければいけません。

では、現在、学校における道徳教育はどのように行われているのでしょうか。

（４） これからの学校における道徳教育のとらえ方 —「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の展開—

学校における道徳教育は、現在、文部科学省の言葉を借りれば、抜本的改善・充実が図られています。平成 27 年 3 月に、小学校、中学校の教育課程に「特別の教科 道徳」が設置されました。その目的や内容を見ることから、学校におけるこれからの道徳教育について確認できます。

1) 教育基本法における道徳教育の理解

—人格の基盤が道徳性—

日本の教育の基本的な在り方を示しているのが教育基本法です。そのなかで、教育の目的は「人格の完成」にあり（第 1 条）、それは、「人格を磨き、豊かな人生が送れるよう」にすることであり（第 3 条）、その基盤に道徳性があること（第 2 条）を示しています。豊かな人生とは、生きがいのある人生であり、幸せな人生に他なりません。人格の基盤となる道徳性を育むのが道徳教育であり、その要の役割を果たすものとして「特別の教科 道徳」が位置付けられています。つまり、学校における道徳教育は、「特別の教科 道徳」をしっかり行うことによって、道徳教育を充実させ、子どもたち一人一人が、豊かな人生、幸せな人生を送っていくことができるようにすることなのです。

2) 道徳教育の目標

—自律的に道徳的实践のできる子どもを育てる—

日本の教育課程について規定する学習指導要領では、総則において、道徳教育の目標を、「自己の生き方（人間としての生き方）を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする」（カッコ内は中学校）と明記しています。

道徳教育は、まず人間としての自分らしい生き方について考えられるようになること。そして、人間としての自分らしい生き方を、具体的な生活や学習活動などにおいて追究していくことを通して、社会的に自立した人間となっていくことを求めているのです。

3) 「特別の教科 道徳」の目標

—人生や生活に生きて働く道徳性を育てる—

道徳教育の要である「特別の教科 道徳」の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の生き方（人間としての生き方）についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」（カッコ内は中学校）となっています。

道徳教育の要としての役割をはたすために、まず、「道徳的諸価値について理解」を深めることを求めています。それは同時に、道徳的諸価値が人間の特質を表すことから人間理解を深めることとなります。そのことを基にして、「自己を見つめる」のです。それは、道徳教育の目標にある「自分の生き方（人間としての生き方）を考える」基本であるということになります。

さらに、道徳的諸価値の理解を基に、「物事を（広い視野から）多面的多角的に考え」ることを求めています。それは、道徳教育の目標の「主体的に判断し行動」するための基本であることとらえられます。

このような3つのことを押さえて、人間としての自分らしい生き方についての考えを深めていくのが「特別の教科 道徳」であると言えます。

何のことはない。私たちが自己の価値意識形成を主体的に行う上で、大切な方法を示してくれているのです。このような方法を身につけられれば、自己の価値意識形成史は飛躍的に発展していきます。そして、かけがえのない自己の人格形成が高められていくこととらえられます。そのような学習を行うことこそ、学校教育の本質的役割と言えるのではないのでしょうか。

おわりに

道徳教育が大切であることは、だれもが認めます。しかし、どうすればよいかのかわからないという声も聞かれます。また、学校の先生方からも、道徳教育や道徳の授業に対して、価値の押しつけになってしまう、分かっていることを確認しているに過ぎない、どれだけ価値について考えても実践にはつな

らないなど、様々な批判的意見を聞きます。

そのようなときに、もう一度原点に返って考えてほしいという願いのもとに、本稿を書きました。道徳教育の原点は、自分の考えや行動の基盤になっている価値意識を見つめることによって、明らかになります。つまり、自己の価値意識形成史を探ることにより、道徳教育とは何かが実感としてわかってきます。

そして、その視点から、本来道徳教育とは何であるのかを振り返ります。さらに、現在なされている道徳教育について、その大本になる法律や学習指導要領を吟味してみます。それらは、一致してとらえられることが大切です。というより一致してとらえられなければいけません。私は、現在の学習指導要領で示す学校における道徳教育や「特別の教科 道徳」の目標は、そのようなものであると確信します。そのようなことも本稿を通して実感いただければと願います。自らの道徳教育（豊かな自己形成）の充実に少しでも役立てていただけるならば幸いです。

参考文献

（自己形成史関係）

自己を語ることについての意義を説き、自己形成の視点から分析している文献として次のようなものがあります。

- 1 新堀通也『夜間大学院—社会人の自己再構築』東信堂 1999
- 2 梶田叡一『人間教育のために—人間としての成長・成熟を目指して』金子書房 2016
- 3 北澤晃『未来をひらく自己物語—書くことによるナラティブ・アプローチ』せせらぎ出版 2011

（道徳教育関係）

これからの道徳教育については、次のような文献があります。

- 1 押谷由夫、柳沼良太編著『道徳の時代がきた！—道徳教科化への提言』教育出版 2013
- 2 押谷由夫、柳沼良太編著『道徳の時代をつくる！—道徳教科化への始動』教育出版 2014
- 3 押谷由夫編著『道徳教育の理念と実践』放送大学教育振興会 2016

（おしたに よしお 初等教育学科）